

## 8 心身障害児の歯科治療に対する保護者の意識調査 — 歯科治療の抑制について —

○木暮ミカ<sup>1</sup>, 大平芳則<sup>2</sup>, 入山満恵子<sup>2</sup>, 栗崎由貴子<sup>2</sup>, 青木さつき<sup>3</sup>

明倫短期大学 1歯科技工士学科, 2専攻科保健言語聴覚学専攻, 3ことばクリニック

*keywords* : 心身障害児, 歯科治療の抑制, 意識調査

### 目的

今回我々は、本学附属歯科診療所における障害者の歯科保健事業の充実と今後の診療体制のありかたを検討するため、当診療所に来院した患者の実年齢とIQより発達年齢を算出し、保護者に対しては、家庭での清掃状況と歯科治療に対する要望を知る目的で、アンケート形式の意識調査を行い、これらの結果を分析して歯科治療に対する保護者の潜在的な要望を探った。

### 方法

対象：平成16年から19年3月までに当診療所を受診した患者のうち、発達年齢が3歳以上である40名を無作為に抽出し、該当する児童の保護者を対象とした。

方法：清掃自立度、歯科治療経験および抑制度、各種抑制および全身麻酔による歯科治療に対する保護者の容認度について5段階評価にて調査した。

調査方法：アンケートは診療所職員を通じて保護者に配布し、その場で回答していただいた。

統計処理：対象患者の発達年齢別にデータを比較し、Excel統計を用いて独立性の検定 ( $\chi^2$ 乗検定) および因子分析 (バリマックス回転) を行った。

### 結果および考察

アンケートの回収率および回答率は100%であった。

各設問の回答の相関を調べたところ、やむを得ない抑制の許容範囲と全身麻酔の是非、歯科治療経験と治療時の抑制度、そして一日の歯磨き回数と治療時の抑制度との間には正の相関がみられた (図1, 2)。また、設問に対する保護者の評定値を変数として因子分析を行ったところ、「ストレス軽減」と「予防」の2因子を抽出した。

### まとめ

今回の調査結果から、発達年齢が低いほど抑制に対する肯定度は高く、発達年齢が高く治療時に抑制の経験がある場合否定的であることより、発達年齢の高い患者に対する抑制はより慎重に選択する必要があることが示唆された。

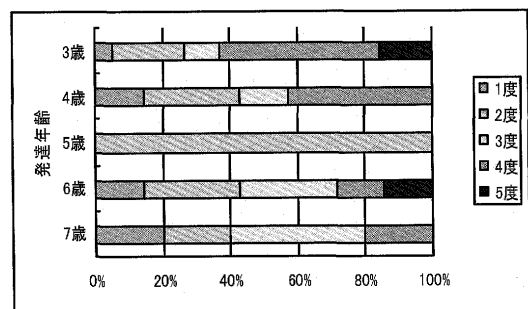


図1 発達年齢別やむを得ない抑制の許容範囲

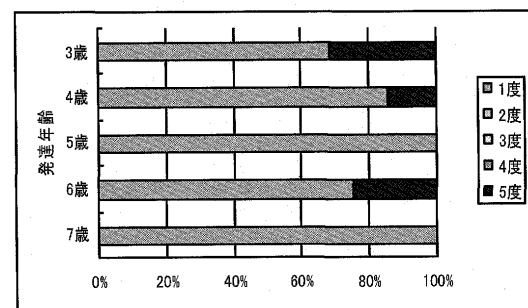


図2 発達年齢別全身麻酔の是非